

革命』について」(『藤原尚教授 広島大学定年祝賀記念 中国学論集』溪水社 1997)
で若干の考察を加えた。

ルタージュの対象に事欠くことはなかった。「香港感懷」という作品も報道文学として読み直すならば、また新しい魅力を発見できるような気がする。

ただ、黄遵憲は詩による報道文学を生み出すために、一方でそれまでの中国に存在しなかった事物や状況を詩の形式に載せて表現することの難しさを抱え、他方では多くの読者が見たことも聞いたこともない事物や状況について理解を得られるように描写することの難しさに直面した。さらに言えば、黄遵憲が「万国公報」という雑誌を購読していたように、この時代には近代ジャーナリズムが次第に定着し、マス・メディアが生まれようとしていた。それは、鈴木氏の言葉を借りれば、「伝達活動がたいへんに不完全な時」から脱しようとする時代だったのである。その時、詩によるルポルタージュというものの存在意義、それ自身が問われなければならなくなるだろう。おおよそ、中国文学の歴史の中で、このような事態に遭遇した詩人がいたかどうか。

もちろん、『人境廬詩草』にはルポルタージュの作ばかりでなく、伝統的な抒情詩や叙景詩もある。それらに対する検討を経ずに黄遵憲という詩人の全体像に迫ることができないことは言うまでもない。問題は山積みだが、今後の課題としたい。

(注)

- 1) 「庚午中秋夜始識羅少珊文仲於矮屋中、遂偕詩五共登明遠樓看月、少珊有詩。作此追和、時癸酉孟秋也。」詩（『人境廬詩草』巻一）、また「述懷、再呈羈人樵野丈」詩（同巻二）を参照。
- 2) 教案は、キリスト教に関連する事件を総称していう。1870年、天津でフランス領事、司祭2名を含む約20名の外国人、50名の中国人信者が殺された。
- 3) 『万国公報』はアメリカ人宣教師、Y. J. アレンが1868年に創刊した月刊雑誌。当初は『教会新報』という名称であったが、74年に『万国公報』と名を改めた。1908年に廃刊されるまで、当時の中国知識人に対して非常に大きな影響力を持った。徐松榮『維新派与近代報刊』（山西古籍出版社 1998）にやや詳しい紹介がある。
- 4) 「製造局」は、『清史稿』兵志七に「同治六年、李鴻章建江南製造局、從事製船。」と見えるものであろう。当時、李鴻章を初めとする洋務派の人々が、洋式の武器を生産するための工場を、中国各地に建設していた。
- 5) 江淹「雜体・劉文学感遇」詩、「感遇」を四部叢刊本が「感懷」に作る。しかし、明・胡之驥註、李長路・趙威点校『江文通集彙註』（中華書局 1984）の校勘記に、「『遇』、叢刊本作『懷』。案叢刊本目錄亦作『遇』、『懷』字誤。」とする。
- 6) 黄遵憲の表現の使い回しについては、稿を改めて詳しく検討する予定である。
- 7) 黄遵憲『人境廬詩草』自序については、拙稿「黄遵憲の『詩境』と梁啓超の『詩界

という部分もあり、古人の「未有之物、未闢之境」こそを作品化すべきなのだという主張が述べられている。

黄遵憲が香港の実状を見聞した時、確かに時代は既に変わっていた。アヘン戦争以降、古人が見たことも聞いたこともない事物、状況が、次々に中国に出現するようになっていたのである。ところが、古人ばかりでなく自分と同じ時代を生きている中国人の多くが、それらの新しい事物、状況についてあまりにも知らなさすぎるのではないかと黄遵憲は考えた。

今の時点で考えている結論から述べるならば、結局、黄遵憲という詩人は心にうつりゆくヨシナシゴトを表現するのがあまり上手でなかった、ということである。黄遵憲自身もその点にあまり興味と関心を持っておらず、むしろ自らの体験を文字に定着させ、広く読者に伝えること、いわばルポルタージュのような文学作品を生み出そうと試みたのではないかと。その時、詩人としての黄遵憲は二つの異なる課題に直面することになったのではないだろうか。一つは、自分の体験を中国古典詩という韻文形式に載せ、なおかつ詩として鑑賞に堪える水準を保つことである。上に見た則天武後の典故表現などはそのための工夫の一つであると考えられる。それとは逆に、もう一方の課題として、詩の内容の分かり易さが求められることになるはずである。というのは、彼がルポルタージュのような文学作品を生み出そうと試み、中国に出現した新しい事物、状況を広く中国の人々に知らしめんと欲したのであれば、作品にある程度の分かり易さが求められなければならないわけである。そのためには、例えば、陳衍には足りないと言われているが「自注」を付ける、とにかく作品を長くして叙述に不足のないようにする、などの工夫があるだろう。詩人が言葉を選び吟味して使用するのは当然だろう。黄遵憲もまた自分が見たこと聞いたことをよりよく描写し読者に鮮明なイメージを与えるために、言葉を選んだはずである。ただ、黄遵憲は自分が工夫して得た表現を何度も繰り返して用いているわけである。何如に表現するか徹底的に拘る詩人であれば、そのような表現の使い回しはなるべく避けようとするだろう。しかし、ルポルタージュの性質を帯びた作品を生み出すため、作品の分かり易さを優先させ、彼は敢えて表現の使い回しを避けなかった。その意味で、少なくとも叙事詩に限って言えば、彼の詩人としての資質が、何如に描くかよりも何を描くかに向いていたと考えてよいだろう。逆に言えば、そのような資質を具えていたからこそ「報道の詩」を志向したのではないだろうか。

幸か不幸か、黄遵憲の生涯は、この香港を手始めとして、日本、アメリカ、イギリス、シンガポールと次々に異文化体験を重ねることになってゆき、ルポ

おわりに

鈴木修次氏が『唐詩 その伝達の場合』（日本放送出版協会 1976）で「報道の詩」について、「伝達活動がたいへんに不完全な時にあって、伝達のために有効なはたらきをなすものは詩である。とくに情緒性をこめた伝達の場合、そうである。」と述べて、岑参の西域詩と杜甫の社会詩とを挙げて論じ、さらに杜甫の社会詩については「……（略）……杜甫みずからも大乱の中に翻弄されつつ、その間の体験やら見聞やらを、あいついでたてつづけに事実のうたとしてうたいこんでいった。それはもう、詩による現代史そのものであった。それゆえこの時期の杜甫の詩は、後世の人によって『詩史』、詩による歴史と称されるにいたったのである。」として、杜甫の「報道の詩」が後世「詩史」と称された点を指摘しておられる。上に引いた『石遺室詩話』でも「公度詩多紀時事」と言い、袁祖光の『緑天香雪簃詩話』に「『流求歌』『越南篇』『台湾行』等作、可称詩史、不僅以詩鳴也。」と言う。黄遵憲の詩にはしばしば時事が詠われ、詩史と称すべき作品がある。恐らく、黄遵憲自身にも自分の作品を「詩史」たらしめんとする意識があったのではないか。

「香港感懷」を作ってから21年後、光緒17(1891)年、黄遵憲は駐英参贊としてロンドンにあった。彼はその前年から自分の詩稿を編纂し始め、この年に『人境廬詩草』自序⁷⁾を撰した。そこで黄遵憲は自己の文学観について次のように述べている。

僕嘗以為詩之外有事、詩之中有人。今之世異於古、今之人亦何必与古人同。

（僕 嘗て以為えらく詩の外に事有り、詩の中に人有り。今の世は古に異なれば、今の人も亦た何ぞ必ずしも古人と同じからんや。）

「詩の外に事有り」という場合の「事」とは、その詩人が置かれた時代の社会環境であって、時代が変われば社会の様相も変わり、その反映である文学作品にも時代による違いが生ずる。古人と同じような詩を作る必要はないのである。「自序」にはさらに、

其述事也、拏今日之官書会典方言俗諺、以及古人未有之物、未闢之境、耳目所歷、皆筆而書之。

（其の事を述ぶるや、今日の官書・会典・方言・俗諺を挙げて、以て古人の未だ有らざるの物、未だ^{ひら}闢かざるの境に及ぼし、耳目の^ふ歴るる所、皆な筆にして之れを書せ。）

はせ、^{かえ}反^{かたど}って喜んで以て瑞と為し、天下の兵器を^と銷かし、金人十二を作りて以て之れに象^{かたど}る。)

とある。

つまり、黄遵憲の表現の使い回しには、語彙の使い回しと典故の使い回しとの2つのレベルが存在することになる。ただ、同じ典故を再度用いるにしても、黄遵憲の場合は、ほぼ同じ字面でそれを用いるため、表面的には語彙の使い回しに似る。特に「日本雜事詩」では、異文化体験という点で題材が似通っているせいか、表現の使い回しが顕著であり、「香港感懷」と同じ語がしばしば見受けられる。けれども、黄遵憲の表現の使い回しは、「香港感懷」と「日本雜事詩」との間だけではなく、実は『人境廬詩草』全体にしばしば見られることなのである。⁶⁾

「香港感懷」には例えば次のような表現を見ることができる。

金輪銘武后* 則天武后と同じく女王であるヴィクトリアの名を取り

寶塔禮耶穌 りっぱな教会ではキリストを礼拝する

「香港感懷」其三 *自注、「香港城名域^{ヴィクトリア}多利、即女主名也。」

「金輪銘武后」句は、『旧唐書』則天皇后紀に、「(長寿二年) 秋九月、上加金輪聖神皇帝号、大赦天下、大酺七日。」とあるように、則天武后が「金輪聖神皇帝」という称号を加えたことを踏まえ、イギリス人が香港の街に女王の名を冠し、ヴィクトリア・シティと呼んだことをいう。陳衍が『石遺室詩話』巻7に「公度詩多紀時事、惜自注不詳、閱者未能尽悉。」と述べているが、この句ももし自注を欠いていたならば、香港の実情を知らない読者が句の意味するところを容易に掴むことができたかどうか、甚だ疑問である。ただ、「香港感懷」が香港の実状を描写することに意を注いだ作品であるとするならば、黄遵憲は自分が想定した読者に対し、何とかして香港の実状を伝えるべく表現上の工夫をしたはずであり、この則天武后の故事の使用こそが、そういった努力の具体的な現れだったのだと考えてよいと思う。彼は、香港の様子を自分で見聞したことのない人々を読者として想定したのではないか。そのため、香港の実状と類似した状況を中国の古典に求め、典故として利用したわけである。黄遵憲という詩人は、一度そのようなプロトタイプを作り上げてしまうと、後にまた似たような事物、状況を描写しようとする時、躊躇することなくそのプロトタイプを流用する詩人なのである。

「香港感懷」其七

金狄摩挲事如昨 銅像を撫でたのはつい昨日のここのように
鉛水清淚流已枯 水銀の清らかな涙も涸れてしまった
「鉄漢樓歌」(卷一)

博物千間広厦開 千間もある大きな博物館が開設され
縦観如到宝山回 心ゆくまで見ると、まるで宝の山から帰ってきたようだ
摩挲銅狄驚奇事 青銅器を手でなでたり、不思議なことに驚いたり
親見委奴漢印来 自分の目で「漢委奴国王」の金印を見ることができる
「日本雜事詩」其五一

「香港感懷」其七も「日本雜事詩」其五一もともに博物館について詠うので、当然といえば当然なのかもしれないが、表現の大部分が重なる。「千間広厦開」は杜甫の「茅屋為秋風所破歌」に、

安得広厦千万間 安んぞ広厦の千万間なるを得て
大庇天下寒士俱歡顔 大いに天下の寒士を庇ひて俱に歡顔せん
とあるのに拠る。「宝山回」は、鳩摩羅什訳「大智度論」に、
如人有手、入宝山中、自在取宝。

(人の手有り、宝山の中に入りて、自在に宝を取るが如し。)
とあるのに拠る。また、元・楊暹の雜劇「劉行首」第一折に、
正是遇仙不成道、如到宝山空手回。

(正に是れ仙に遇ひて道を成さず、宝山に到りて空手にして^{かえ}回るが如し。)
と見え、「宝山空回」で成語として用いられたようである。「摩挲銅狄」は、『後漢書』方術伝・蓊子訓に、

後人復於長安東霸城見之。与一老公共摩挲銅人、相謂曰、『適見鑄此、已近五百歳矣』。

(後人 復た長安の東霸城に於いて之れに見^あう。一老公と共に銅人を摩挲し、相謂いて曰く、『適^{たま}たま此れを鑄るを見て、已に五百歳に近し』と。)
とあり、また『漢書』五行志下之上に、

史記秦始皇二十六年、有大人長五丈、足履六尺、皆夷狄服、凡十二人、見于臨洮。……(中略)……。是歳、始皇初并六国、反喜以為瑞、銷天下兵器、作金人十二以象之。

(史に記す、秦始皇二十六年、大人有り、長さ五丈、足履六尺、皆な夷狄の服、凡そ十二人、臨洮に見はる。……(中略)……。是の歳、始皇 初めて六国を并^あ

珊有詩。作此追和、時癸酉孟秋也」(卷一)

時検校羅日曆看 その時々手帳を見ながら小盗人を取り締まる。
沈沈官屋署街弾 ひっそりと静まりかえった役所には警察署と書かれている。
 「日本雜事詩」其四六

いずれも大きな建物が静寂に包まれた様子を形容するのに「沈沈」の語を用いた例であるが、必ず「屋」の字とセットで用いられている点がおもしろい。黄遵憲の表現の使い回しについては、まずこのような、ある事物を描写するのにほとんど同じ語彙を用いて形容している点を挙げることができる。これとは別に、よく似た状況を同一の典故を用いて描き出す場合がある。

豈欲珠崖棄 どうして香港を放棄して
 其如城下盟 城下の盟を結ぼうとするのか
 「香港感懷」其二

要荒又議珠崖棄 広州ではまたもや外国への割譲が議論されている
 霸業瀾思羸屋尊 漢の頃、南越王趙佗がここで覇を称えたこともあったのに
 「羊城感賦六首」其五 (卷一)

これは、『漢書』賈捐之伝に

臣愚以為非冠帶之國、禹貢所及、春秋所治、皆可且無以為。願遂棄珠崖、專用恤關東為憂。

(臣 愚かにも以為えらく、冠帶の國、禹貢の及ぶ所、春秋の治むる所に非ざれば、皆 且に以て為す無かるべし。願わくは遂に珠崖を棄て、専ら關東を恤うを用て憂いと為せ。)

とあるのに拠り、国土の一部を放棄することをいう。珠崖は『漢書』武帝紀に「遂定越地、以為南海・蒼梧・……(中略)……・珠厓・儋耳郡。」と見え、応劭注に「二郡在大海中崖岸之辺。出真珠、故曰珠厓。」とあり、現在の海南省東北部に当たるらしい。

博物張華志 張華の『博物志』に記された内容が
千間広廈開 千間もある大きな建物が開設され陳列してある
摩挲銅狄在 そこにある銅像を撫でさすったりしても
悵望宝山回 宝の山を哀しげに見遣ったまま帰ってくるようなものだ

たまたま香港の実状を題材として選択した結果に過ぎないということになるのだろうか。

しかし、「香港感懷」の感情表現の抑制は、単に題材の問題であるとして片付けてよい性質のものではない。言うまでもなく、イギリス支配下に置かれた香港の現実を目にした黄遵憲は、いろいろなことを感じ、いろいろなことを考えたに違いない。だからこそ、その見聞を基にして作った詩に「感懷」の2字を含む題を与えたのである。けれども、詩人は自分の感じたこと、考えたことを言葉を尽くして表出しようとするのではなく、自分が見聞した香港の現実を写實的に描写することの方に力を注いでいる。「感懷」2字に就いて言えば、「懷」そのものよりも「感」の方に、或いは彼になにもものかを感じしめた外界からの情報、刺激、この場合は香港の実状を描写する方に、重きが置かれているわけである。黄遵憲のこのような作詩態度こそが、「香港感懷」に限らず、彼の詩人としての資質をよく示していると思われる。

三

上にも述べたように、「香港感懷」という作品は、「感懷」の2字が詩題に含まれているにも関わらず、抒情詩の色合いよりも叙事詩の色合いの方が、結果としては濃くなっている。これは、自分が見聞した香港の現実に触発されて考えたこと、感じたことを表出することを敢えてせず、自分にそのような感情を与え思考を迫った香港の姿を描写しようとしたためなのだろう。

ところで、「香港感懷」には、黄遵憲がそれ以前に作っていた詩の一部分によく似た表現が見られ、逆に「香港感懷」に見られる表現がそれ以後に作られた詩に見出せる場合もある。悪く言えば、彼は表現の使い回しをしているわけである。『人境廬詩草』は同治3（1864）年に始まる編年体であって、同治9年の「香港感懷」はまだ初期の作品なので、実際は後者の例の方が多い。以下にくつか例を挙げる。

黄標千万積 千万の錢を積み黄色い札を掛けたお金持ちの家の方が
翻訝屋沈沈 かえってひっそりと静まり返っているのは不思議なことよ
「香港感懷」其五

沈沈矮屋万行瓦 ひっそりと静まりかえった試験会場が^{いらか}瓦を連ね
昨者煮海今堆塩 昨日は海水を煮ていたところに今日は塩が盛ってある
「庚午中秋、夜始識少珊文仲於矮屋中。遂偕詩五共登明遠樓看月、少

暫垂鵬翼扶搖勢	つむじ風に乗って大空を舞い飛ぶ鵬の翼をしばし収め
一学蠅頭世俗書	蠅の頭ほどの小さな字がぎっしりの俗な書を学んでみた
蕩蕩天門争欲上	みながあ的那天への入口へ我も我もと上ろうとするが
茫茫人海豈難居	海のように広々とした人の世も住みにくいとは言えまい
尋常米価無須問	米の値段はいくらなどとありふれた問いなどしないでもらいたい
要訪奇才到狗屠	すぐれた才能を求めるならば犬殺しの住むところにまでも行くべきだろう

まだ十分な調査とは言えないが、管見の及ぶ限りでは、「感懷」という詩題は中唐の頃から使われるようになったようである。劉長卿に「感懷」と題する詩があり、白居易に「早秋曲江感懷」、劉禹錫に「元日感懷」なる作がある。杜牧にも「感懷」という詩があるが、それとは別に「張好好詩」の序に、

牧太和三年、佐故吏部沈公江西幕。好好年十三、始以善歌来樂籍中。後一歲、公移鎮宣城、復置好好於宣城籍中。後二歲、為沈著作述師以双鬟納之。後二歲、於洛陽東城、重睹好好、感旧傷懷、故題詩贈之。

(牧 太和三年、故吏部沈公の江西の幕に佐たり。好好 年 十三、始め善く歌うを以て樂籍中に來たる。後一歲 公 移りて宣城に鎮し、復た好好を宣城の籍中に置く。後二歲、沈著作述師の爲に双鬟を以て之れを納む。後二歲、洛陽東城に於いて、重ねて好好を睹て、「感旧傷懷（旧に感じて懷いを傷ましむ）」、故に詩を題して之れに贈る。)

という。この用例によって詩題に用いられる「感懷」という語を解釈するのは当たらないかもしれないが、ひとつのヒントにはなるだろう。すなわち、「感懷」とは、外側から与えられた刺激、情報などによって精神活動を促され、そこから何らかの思いが生ずること、また生じた思いのことを意味するのであろう。杜牧の「張好好詩」序に即して言えば、洛陽東城で目撃した現在の好好の姿が外部から与えられた情報であり、その情報によって昔のことを思い出し、心を悲しませたということになるのだろう。

上に見た「將に廷試に應ぜんとす。感懷」詩の場合、黄遵憲自身が受験の直前であることが外部からの情報、刺激なので、当然の事ながら作中では詩人の姿が中心となって描かれる。ところが、「香港感懷」の場合、香港にまで足を伸ばしたのは黄遵憲の自発的な行為であつたにしても、詩を作る契機となつた外部からの情報、刺激は、詩人の耳目を圧倒する香港の実状であつたから、詩人の姿が作品にほとんど現われないのである。だとすれば、「香港感懷」という作品の中で、詩人が敢えて感情表現を抑制したことはむしろ例外的なのであつて、

排山酒肉林 美味しい酒や肉の林が山を押し退ける
「香港感懷」其五

便積金如斗 たとえ金を一斗も積んだところで
能從聚窟消 あっという間に遊郭へと消えてしまう
「香港感懷」其六

山頭風獵獵 山に吹く風はひょうひょうと
猶自誤龍旗 ユニオン・ジャックを黄龍旗と間違えて
「香港感懷」其十

それぞれの詩句の行間から、アヘンが蔓延し治安が劣悪なことに憤り、香港が一大歓楽街となり果ててしまったことを嘆き、外国の支配下に収められたことを嘆き哀しむ詩人の姿を見出すことができるだろう。寛久美子氏が、「又、イギリスに割譲された香港島での見聞作「香港感懷十首」は、あらわな慷慨の言葉こそ少ないけれども、祖国の一部が外国人に支配されているという現実をあざやかにイメージ化する。慷慨の言葉がないだけに、かえって詩人の胸をかむ烈しい憤りを感じさせるものがある。」(『中国詩人選集二集 黄遵憲』解説 岩波書店 1963) と述べておられる通り、この「香港感懷」という作品の場合、自らの感情を露出した表現をしないことが、却って読者に詩人の悲痛な心情を想像させる効果を挙げ得ていると見た方がよいだろう。ただ、「香港感懷」に見られるような感情表現の抑制が、詩人の意図するところでなされたかのかと言うと、必ずしもそうではなかっただろうと思われる。この点について、以下もう少し考えてみたい。

二

黄遵憲が作った詩で、「感懷」の2字を含む詩題を与えられたものに、「感懷」(『人境廬詩草』巻一)、「寓汕頭旅館感懷、寄梁詩五居士」(巻一)、「和鍾西耘庶常德祥津門感懷詩」(巻二)、「感懷」(巻四)、「自香港登舟感懷」(巻六)、「感懷、呈樵野尚書丈、即用話別図靈字韻」(巻八)がある。今、例として「將應廷試感懷」(巻二)を挙げる。

二十餘年付軫車	二十年あまりの歳月を過ごしてきたが
自摩髀肉問何如	髀肉をなでては「こんなことでどうする」自らに問うてみる

1870年の「香港」は、黄遵憲にとって生まれて初めての本格的な異文化体験となった。当時の香港は、道光22(1842)年の南京条約によってイギリスに割譲されてからやがて30年を経ようとしており、中国に対する欧米列強の脅威が最も先鋭に、しかもそれが目に見え耳に聞こえる形で具現化されていた。「彈指樓台現」(其一) 建ち並ぶビルディングの間を、「酋長虬髯客 豪商碧眼胡」(其三) カイゼル髯に青い眼の外国人が我物顔で闊歩する。聞こえて来るのは、「夷言學鳥音」(其五) 土地の中国人が真似る、鳥の囀りのような外国語であり、「飛輪齊鼓浪 祝砲日鳴雷」(其九) 遙々やって来た外国の軍艦が撃ち鳴らす祝砲の音だった。道には、「流水游龍外」(其八) 車や馬が溢れ、空には、「御氣毬千尺」(其八) 気球さえ浮かんでいた。作品には当時の香港の様子が、非常に生き活きと描写されている。黄遵憲の香港滞在は、『年譜』に「九月十一日、先生二叔父翰藻卒於家。二十四日、先生至潮州、聞二叔父逝世訊。至香港、有感懷詩十首。寓汕頭、有詩寄梁詩五、再至潮州、又有詩寄之、蓋去乙丑避兵時已六年矣。」とあり、9月末には故郷の嘉應州に帰り着いていることから推して、1週間にも満たなかったはずだが、彼の香港の描写は、読者の脳裏に鮮明な映像を結ばせるに充分だと思う。

しかし、この十首の作品には「感懷」という詩題が与えられているにも関わらず、詩人の心情がナマの形で表出されることがあまりない。詩人の「感懷」は、むしろ次のような詩句に見える描写から読み取られねばならない。

為誰刈藜藿 なぜ食用になるアカザを刈り取って
遍地出芙蓉 阿芙蓉(アヘン)ばかりを蔓延させるのか
「香港感懷」其一 (『人境廬詩草』卷一)

伝聞哀痛詔 道光帝の「香港を失ったことを深く恥じる。」という遺詔を
猶灑淚縱横* 伝え聞き、涙が溢れて止まらない。

「香港感懷」其二 *自注、「宣廟遺詔、深以棄香港為恥。」

五丁開鑿後 金の力と人の力で切り開いたこの香港は
欲界亦仙都 凡人が暮らす欲界でありながら、仙人が住む世界でもある
「香港感懷」其三

沸地笙歌海 歌舞音曲の海が地面を沸き立たせ

黄遵憲「香港感懷」詩について

小 川 恒 男

はじめに

同治9（1870）年8月頃、黄遵憲は広州に赴き郷試に応じた。しかし残念ながら、この時の受験では及第するに至らず、9月の末には故郷の嘉応州に帰り着いている。錢仲聯氏の「黄公度先生年譜」（錢仲聯箋注『人境廬詩草箋注』上海古籍出版社 1981 に附録。以下『年譜』）同年の条に、「秋、至広州、応郷試。……（中略）……。九月晦日到家。」と見える。嶺南の地であるから、晩秋とは言っても、寒さに身を震わせねばならないような旅ではなかったろうし、黄遵憲もまだまだ若く、時に23歳でしかなかった。

この時期の黄遵憲は、科举制度に対して批判的な考えを既に持っていたようである。にも関わらず、自身はどうしても科举を受験せざるを得ない状況に置かれ、内心忸怩たるものがあつたと想像される。この間の経緯については、麦生登美江氏が「しかし、科举の受験を一蹴してしまうこともむずかしかった。無位無冠であつては政治には参画しにくいし、旧家の長男に寄せる一家の、とりわけ幼時から掌中の玉のように慈しんでくれた曾祖母の期待が大きかったからである。」（「黄遵憲—その詩と軌跡と—」（『岡村繁教授退官記念論集 中国詩人論』汲古書院 1986）と、たいへん手際よくまとめておられる通りだろう。加えて、一家がこの5、6年前に戦乱に巻き込まれて貧窮したため、経済的な理由もあつての受験だったはずである。

一方、受験のための旅は彼の耳目を次第次第に大きく開いていくこととなった。また逆に、この頃から見聞をより広めるために、自ら進んであちらこちらへと足を伸ばすようになったのではないと思われる。『年譜』同治9年の条には、「先生本年因研究天津教案事、取『万国公報』²⁾及製造局所出之書³⁾尽読之、⁴⁾先生之究心時務自此始。」とあつて、彼が「時務」に関心を抱き、目を広く社会全体へ向け始めたことを裏付ける。

そこで、広州からの帰途、彼は香港に立ち寄り、その時の見聞をもとに「香港感懷」と題する五言律詩連作10首を作った。